

セルフコントロールの概念をめぐって

—— Gottfredson & Hirschi の Self-Control についての心理学的視点からの検討 ——

藤 野 京 子

1 はじめに

ゴットフレッドソンとハーシーが著した「犯罪の基礎理論」(Gottfredson & Hirschi, 1990)における鍵概念はセルフコントロールである。この理論は、人間は自身の利得や快楽を追求する存在であるとの前提で構築されており、セルフコントロールが低く、十分に統制できなかった結果、犯罪やそれと類似の行動がもたらされるという主張が展開されている。

この理論が発表されて以来、セルフコントロールと非行・犯罪との関連が認められたとする実証研究が積み重ねられるなど、セルフコントロールの概念は犯罪・非行分野で注目されている。ゴットフレッドソンやハーシーによれば、これらの実証研究の中には、彼らの理論を忠実に反映していないものも少なからずあるようだが、彼らの理論に合致するかどうかは別として、非行・犯罪を説明するに際して、セルフコントロールやその類似概念を変数に取り入れる研究動向(e.g., Wikström & Treiber, 2007; Agnew, 2005)がうかがえる。したがって、このセルフコントロールの概念を多角的に検討することは意味があろう。

この理論が発表されてから比較的に浅いころ、筆者は本著を紹介した(藤野, 1994)が、本稿では、それ以降の動向を踏まえながら、彼らのセルフコントロールの概念を検討する⁽¹⁾と共に、セルフコントロールの概念は心理学の分野でも扱われているので、その知見にも触れることにする。彼らの理論で示唆されることをヒントとして、実証レベルで非行・犯罪と関連があるとされるセルフコントロールについての研究課題を明らかにしてみたい。

2 「犯罪の基礎理論」におけるセルフコントロールの概念及びその測定をめぐって

「犯罪の基礎理論」では、犯罪行動をするかどうかの安定した個人差－犯罪性(criminality)－としてセルフコントロールの概念を提示している。このセルフコントロールの概念は、一言で言うならば、“その時々への誘惑に対する脆弱性の程度”(Gottfredson & Hirschi, 1990, p.87)、“その行為の長期的な結果を考慮することなく短期的な満足感を追及する個人の傾向”(同, p.177)である。彼らは、犯罪行動から読み取れる特徴として、①満足遅延をせず「今ここでの」の志向となる傾向を有する、②行動するにあたって、勤勉さ、粘り強さ、持続性に欠ける傾向を有する、

③慎重であるよりも冒険好きであり、思索的であるよりも活動的であり、言葉を使うよりも身体を使うことを好む傾向を有する、④長期にわたる職業従事に関心も覚悟もなく、安定した生活を送らない傾向を有する、⑤訓練や見習いを要するようなスキルを持つ必要がない、⑥自己中心性、冷淡、他者の苦悩や欲求に無関心な傾向を有する、⑦即座に快が得られる犯罪以外のものを追い求める傾向を有する、⑧必ずしも人と群れて行動したり社交的であったりするとは限らないが、同じ条件下で比較するならばその傾向を有する方が犯罪に巻き込まれやすい、⑨欲求不満耐性が低く、身体的手段でなく言語的手段でもって葛藤に対処する能力が乏しい傾向を有する（同、pp.89-90）、と記している。そして、“セルフコントロールを欠く人とは、衝動的、鈍感、（精神的に対して）身体的、危険志向的、近視眼的、非言語的な傾向にある”（同、p.90）とまとめている。

この理論検証でよく用いられるセルフコントロールの尺度に、Grasmick, Tittle, Bursik, & Arneklev (1993)⁽²⁾やそれを一部改変したGibbs & Giever (1995)がある。Grasmick et al. (1993)は、この理論が提示しているセルフコントロールの測定に、当初、カリフォルニア人格目録の中の38項目から成る下位尺度Sc（自己統制力）が使えるかと考えたが、同理論が掲げる概念との重複はあるものの、全く一致しているわけではないとして、セルフコントロールの低い人の特徴として挙げられた上述の①から⑨の要素を一つ一つ検討して、それを尺度化するに至っている。具体的には、①はWilson & Herrnstein (1985)が言及したものと一致するとし、衝動性であるとしている。②は（複雑課題よりも）単純課題への志向であるとしている。③の前半部分の説明からは危険志向を、③の後半部分の説明からは思索的あるいは精神的であるよりも身体を動かすことを好む傾向を取り出している。⑥は自己中心性であるとしている。⑨についてはいらいちやすさを扱うことにしている。そして、これら6領域について24項目を設定している。ちなみに、⑤については、ゴットフレッドソンとハーシーからすれば、訓練や見習いを必要とするスキルを得るために複雑な課題に取り組んだりする意思なり将来的志向を欠くことにおそらく言及しなかったであろうとしながらも、セルフコントロールの定義とは関係ないとして除いている。また、④と⑦も除いているが、これら3つ（④⑤⑦）はいずれも、セルフコントロールの低さに通じるパーソナリティ特性というよりもむしろ、セルフコントロールの低さゆえ予想される結果であることを理由に除いている⁽³⁾。そして、作成した尺度は1因子であることが確認されたとしている⁽⁴⁾。

しかし、Hirschi & Gottfredson (1993, p.49)は、Grasmick et al. (1993)の尺度に対して批判的な見解を示しており、セルフコントロールの高低は、Keane, Maxim, & Teevan (1993)の尺度のようにシートベルトの着用の有無などの実際の行動についての観察結果なり自己報告なりが望ましいとしている。Grasmick et al. (1993)で測定されるものへの回答バイアスが、セルフコントロールの高低によって異なるとの主張である。実際、この主張を実証的に裏付けている研究

もある (Piquero, MacIntosh, & Hickman, 2000)。

とはいえ、Pratt & Cullen (2000) のメタ分析では、セルフコントロールを、Grasmick らの測定のように態度として測定した場合でも Keane らのように行動として測定した場合でも、その低さが犯罪に影響を及ぼすことを支持する結果が得られており、それ以降に行われた Tittle, Ward, & Grasmick (2003a) でも、同様の結果が得られている。すなわち、回答バイアスがあるにせよ関連性は認められる、ということになる。

加えて、セルフコントロールを犯罪行動ないしその類似の行動で測定するのでは、Akers (1991) が指摘するようにトートロジーであって、セルフコントロールの正体は明らかにされないことになる。実際、このトートロジーを避けるため、セルフコントロールの測定に Grasmick et al. (1993) の尺度が使われることが多いようである。

このほか、Hirschi & Gottfredson (1993) は、なぜ人は犯罪をしないのかとの視点でこの理論が構築されていることを Grasmick et al. (1993) の尺度はふまえていないと批判している。この理論では、犯罪をしやすいパーソナリティなり犯罪行為を行うよう動機付ける力なりを想定しておらず、犯罪の行為者と犯罪が提供する明白な瞬時の利得との間に位置している障壁とセルフコントロールをみなしている (Hirschi & Gottfredson, 1993, p.53)。セルフコントロールを欠くことが犯罪の原因であり、多くのパーソナリティ特性は、セルフコントロールを欠くことに伴う副産物であるとの立場である。しかし、Grasmick et al. (1993) の尺度項目の中には、特定の行為に直結する動機要因と受け取れるものが含まれている。理論構築の立場からすれば、これは根幹を覆すことになるので見過ごせないであろう。しかし、セルフコントロールと非行・犯罪の関連を単に実証する立場からは、さほど問題とは思われない。

3 セルフコントロールにかかわる心理学における近隣概念の検討

ところで、セルフコントロールの概念は、心理学の分野でもしばしば登場する。「米国心理学会 (APA) 心理学辞典」(VandenBos, 2006) でセルフコントロールの項を調べると、“自身の行動 (顕在、潜在、情動、身体機能) を指令どおりにしたり自身の衝動を抑制・抑止したりする能力。短期的利得が長期的損失あるいは (短期的利得以上に得られる) 長期的利得と対立する状況下、長期的結果を選ぶ能力。短期的結果の選択は衝動性と呼ばれる。自己訓練 (self-discipline)、自己制御 (self-regulation) の項も参照”と記されている。そこで、自己訓練の項を見てみると、“自身の衝動や願望の統制、先行する目下の満足よりも長期的目標なり改善なりを概して好むこと”とある。また、自己制御の項では、“望ましい行動を促進する個人的環境と望ましくない行動、自己評価 (self-evaluation)、賞罰の自己実施 (self-administration)、あるいはそれらの組み合わせを引き起こす傾向にある周囲の状況とを構造化して、望まれたり望まれない行動を引き起こす条件に対する自己監視 (self-monitoring) を通じて自身の行動を統制すること”となっている。

ついでに、自己制御モデル (self-regulation model) の項を見てみると、“外的牽引なしに方向づけられた行動を自己管理 (self-management) する過程についての5段階モデル。その段階は、問題同定、コミットメント、実行、環境管理、般化”とされている。すなわち、セルフコントロールの先行研究を検討するにあたっては、同義語あるいは類義語とみなされる自己訓練、自己制御、自己監視、自己管理といった概念の研究についても目を配ることが適当ということになる。

自己制御について、Gray (1982) は、罰刺激によって活性化される行動抑制システム (behavioral inhibition system: BIS) と報酬刺激によって活性化される行動接近システム (behavioral approach system: BAS) の2システムを気質レベルのものとして提唱している。両システムの感受性に個人差があり、すなわち、BISが高い者は、罰への感受性が高く、罰の存在を知らせる手掛かりによって行動が抑制されやすく、一方、BASの高い者は、報酬への感受性が高く、その手掛かりによって接近行動が容易に起動されるとして、逸脱行動はBISが低くBASが高い場合とされ、その尺度の開発も行われている (e.g., Carver & White, 1994; 安田・佐藤, 2002)。加えて、自己制御にかかわる第3の気質として、受動的・自動的なBIS/BASを調整する実行注意コントロール (effortful control: EC) がある (Carver, 2005) とされ、この能動的・意図的な自己制御について、行動抑制の制御、行動始発の制御、注意の制御を下位尺度とする尺度も開発されている (Rothbart, Ahadi, & Evans, 2000; 山形・高橋・繁耕・大野・木島, 2005)。そして、このECと非行との関連が示唆されている (Ellis, Rothbart, & Posner, 2004)。さらに、気質ではなく成長の過程で獲得される自己制御能力もあるとされ、原田・吉澤・吉田 (2009) は、気質と獲得された能力の因果関係を含めた包括的モデルの検討を行っている。セルフコントロールがこのような多層の構造をもつのであれば、その関係性を明らかにしていくことは今後の課題であろう。

このほか、Higgins (1997) の制御焦点理論 (regulatory focus theory) も注目に値する。従来の自己制御研究では、快に接近し不快を回避するという快樂原則が基本原理 (Carver & Scheier, 1982) とされてきたが、制御焦点理論では、この快樂原則の追求の仕方に利得と損失の2種類のモードがあるとして、利得の存在に接近し、利得の不在を回避するように行動をコントロールする促進焦点 (promotion focus) と、損失の不在に接近し、損失の存在を回避するように行動をコントロールする予防焦点 (prevention focus) があると主張している。利得と損失に対する注意の払い方が個人によって異なることを思い浮かべると合点がいく。快・不快についての人間の捉え方の個人差を踏まえることも肝要であろう。

また、我が国の「青年心理学事典」の自己統制 (self-control) の項では、セルフコントロールを“外的な援助や監視がない状況で、相対的に困難な目標志向の行動を自分の意志・意図に基づいて維持・遂行する過程”と定義している (塚本, 2000)。そして、研究系譜には、①幼児は自我が未発達で、その行動は快樂原則に支配されているが、自我の発達によって現実原則に基づい

た行動がとれるようになると、満足の遅延や衝動統制などのセルフコントロールが可能となり、また、親のしつけや社会的規範の内面化によって超自我が発達すると、セルフコントロールはさらに促進されるというフロイトの精神分析学の流れの研究、②他者の言語指示によって行動の統制ができる段階、自身の外顯的な言語指示によって行動の統制ができる段階、自身の内潜在的な言語指示によって行動が統制できる段階の3つの発達段階があるとしたルリアの流れの研究、③個人がある変数を変化させることで、その変数の関数となっている自己の反応の出現確率を変化させる過程を自己統制とするスキナー及びそれに続くバンデューラの学習理論からの研究、があること、加えて、発達研究分野では、成長につれて満足遅延や誘惑への抵抗などのセルフコントロールができるようになることが明らかにされていること、に言及している（塚本，2000）。成長過程でセルフコントロールを獲得していくというゴットフレッドソンとハーシーの主張は、この発達研究での見解と一致していよう。

心理学分野でのセルフコントロール尺度の例には、教師が生徒のセルフコントロールを一次元で評定する Kendall & Wilcox（1979）の Self-Control Rating Scale（SCRS）や、自身の問題行動解決に対するセルフコントロール方法の適用傾向を測定する Rosenbaum（1980）の Self-Control Schedule（SCS）がある。前者は、セルフコントロールは行動で測定すべきであるとの Hirschi & Gottfredson（1993）に合致する。後者は、ストレス場面で発じる情動的、認知的反応の制御である調整型（redness）セルフコントロール、習慣的な行動をより望ましい行動へと変容していくための改良型（reformative）セルフコントロールという異質の外的要因に対するコントロール度を測定するもので、杉若（1995）がその日本語版尺度を検討している。これらが非行・犯罪にどのように関わるかの検討も有用であろう。

4 「犯罪の基礎理論」が挙げるセルフコントロールの低い人の特徴についての検討

つづいて、2節で挙げた Gottfredson & Hirschi（1990）がセルフコントロールの低い人の特徴として挙げたものを心理学的側面から個々に検討する。①に関して、Grasmic et al.（1993）は衝動性であるとしているが、衝動性の定義は、熟考せずに行動する傾向、結果に対する感受性の低さ、不適切な行動を抑制できない傾向、強化を遅延される状況や不確かな状況に対する耐性の低さ、など幅広く、研究間で共通した見解が得られていない（山口・鈴木，2007）。衝動性の自己報告尺度には、Eysenck, Pearson, Easting, & Allsopp（1985）の I₇や Patton, Stanford, & Barratt（1995）の時間やリズムの歪みを含めた広範囲の認知的次元、脱抑止行動、不十分な計画ゆえの衝動行動の3下位尺度で構成される Barratt Impulsiveness Scales ver.11（BIS-11）などがあるが、これらで測定されるものと Gottfredson & Hirschi（1990）が挙げているものの同異を検討する必要があるだろう。

③の前半部分の危険志向については、刺激希求性－新奇で変化する多様な経験を要求し、それ

を得るための身体的社会的なリスクを厭わないパーソナリティ特性ーと関連があろう。これは、最適覚醒水準に個人差があつて、この特性の高い人は、刺激への慣れが早く退屈しやすいため、強い覚醒を快と感じるというもので、非行少年や犯罪者にこの傾向がよくみられるとされている。Zuckerman, Eysenck, & Eysenck (1978) の Sensation Seeking Scale-Form V では、スリルや危険を伴う活動を好む特性、新奇な経験を求める特性、社会的抑制を無視して自由な欲望充足を図ろうとする特性、変化のないことや反復に退屈する特性、の下位尺度でこれを測定している。

④については、Grasmick et al. (1993) の尺度では取り上げていないが、長期的視点を欠いている、ないし、それへの関心が低いことを意味しており、白井 (1993) が行っているような時間的信念研究との接点があろう。Gottfredson (2011) では、近視眼的な人は犯罪がもたらす長期的結果にあまり気を配らないので、法がもたらす制裁における確実性や厳罰における変化によっても変わらない、としている。セルフコントロールを行うかどうかの動機づけにかかわるものと位置付けられるのではあるまいか。

⑥は、他者に迷惑がかかろうとも過度に自身に関心を有することであるが、他者と自身への注意の配り方によって、外界に対して敵対的で他者を貶めるニュアンスが強い自己中心性と、自己愛的で自己強化的ニュアンスの強い自己中心性に分けられる (De Vries, De Vries, De Hoogh, & Feij, 2009, p.637) とされている。前者の測定例には Weigel, Hessing, & Elffers (1999) の egoism scale が、後者の測定例には Paunonen, Haddock, Forsterling, & Keinonen (2003) の Supernumerary Personality Inventory (SPI) が挙げられる。後者は自動的ないし無意図的にセルフコントロールがなされないよう作用するのに対して、前者はセルフコントロールをする必要がないとの判断過程が入っていると推測される。

このように、Gottfredson & Hirschi (1990) が列举するセルフコントロールの低い人の諸特徴は、そのそれぞれが多義に解釈されうるもので、セルフコントロールを行う過程における位置付けも多様な様子である。今後、その整合性を含めて整理を行う必要があろう。

5 社会的絆理論について

「犯罪の基礎理論」を著す前に、ハーシーは「非行の原因」で“社会に対する個人の絆が弱くなったり失われたりする時に非行は発生する” (Hirschi, 1969, p.29) との社会的絆理論を提示しており、近年、この社会的絆とセルフコントロールは同義であると言及するに至っている (e.g., Hirschi, 2004⁽⁵⁾, p.543; Gottfredson, 2011, p.130)。同義であるならば、社会的絆が意味するところを熟考することはセルフコントロールを別の視点から理解することにもつながり、意義があろう。そこで、以下に絆理論を概観してみることとする。

社会的絆の4要素のうちアタッチメントは、他者との結びつきである。“社会の規範は社会の諸成員により共有されたものなので、規範の侵犯は他者の願いや期待とは相反する行為”であり、

“他者の願いや期待に無頓着であるならば一つまり他者の意見に鈍感であるならば一、それだけ規範に縛られず、自由に逸脱できる” (Hirschi, 1969, p.18) としている。コミットメントは、道法的な行動の枠組の中で行ってきたこれまでの投資のことである。逸脱に伴いそれを失うリスクや今後得たいと望んでいるものが得られなくなるリスクを判断して (同, p.21)、非行をするかどうかを選択するというものである。インボルブメントは、道法的な活動への参加を通じた社会とのつながりである。時間とエネルギーは元来限られているので、道法的な活動で多忙であるならば非行に費やす時間などはなくなる (同, pp.21-22) というものである。ビリーフは、個人が所属している社会や集団に広くゆきわたった規則に従うべきだとの考えである。非行少年として、非行を悪と承知していることが多いが、社会のきまりに従わなければならないと信じる程度には人々に間に多様性が認められるとし、信じる程度が低いほど破りやすくなる (同, p.26) としている。

コミットメントは精神分析学における現実原則にもとづく自我や常識に相当する社会学的概念であり、アタッチメントは超自我や良心に相当する (同, p.20) としており、自我や超自我の概念をふまえていることがわかる。また、規範、良心、超自我の内面化の本質は、個々人の他者に対するアタッチメントにあり、アタッチメントとビリーフをあわせれば、内面的統制の大部分をカバーすることになる (同, p.18及び注9) として、両者の関係について、きまりを作った者への尊敬の念がそのきまりを守らせることになるとのピアジェの主張を引用している (同, p.29)。特にアタッチメントを重要視していることがうかがえる。

加えて、アタッチメントのうち“両親に対するアタッチメントが中心的な変数になる” (同, p.86) として、親子の情緒的な絆は両親の理想や期待を伝えるいわば架け橋であって、両親から疎外されていると、子どもは道徳的規則を学習することもないし、道徳的規則についての気持ちも持たないし、適切な良心や超自我を発達させることもない (同, p.86) と言及の上、アタッチメント理論の提唱者であるボウルビイの母子関係の不良が非行的人格の発達および将来にわたる不品行の主要因であるとの主張を引用 (同, p.86) している。ハーシーのアタッチメントの概念がボウルビイのそれを考慮していることが見て取れる。ボウルビイ以降、「特定の他者との間に築く緊密な情緒的結びつき」であるアタッチメントの研究が心理学の分野では盛んに行われているが、それは生涯にわたって個体の適応に寄与し得るとされている (遠藤, 2005, pp.1-3)。非行・犯罪現象について、認知や思考のみならず情緒が重要な役割を果たしていることにハーシーが着目している点は注目に値する。

社会的絆理論をまとめてみると、①自我、超自我の両機能をふまえていること、②人間をビリーフやコミットメントのような認知的判断を下す存在であると同時に、アタッチメントという情緒的結びつきを有する存在であるとみなしていること、③両親へのアタッチメントが良心や超自我というビリーフの発達に影響を及ぼすとしており、そこに情緒と認知の関連性を示すと同時に、

養育の重要性を指摘していること、になろう。

6 「犯罪の基礎理論」と社会的絆理論の統合について

セルフコントロールも社会的絆も同義であるとした Hirschi (2004) では、両理論の統合⁽⁶⁾を試みるかわりに、セルフコントロール尺度として、学校が好きか、良い成績をとることはどのくらい大切か、など社会的絆を示す項目で構成された尺度を提示している⁽⁷⁾。Gottfredson (2011, p.133) でも、セルフコントロールが確立されると、親を失望させることに対する恐れ、家族や友人に対して恥ずかしいと感じること、愛情や尊敬を失うこと、その人が気を配っている人から承認されないこと、などが人生にわたって制裁として作用するようになるとして、それらの社会的絆はセルフコントロールに統合されるので、社会的絆とセルフコントロールを実証的に区別することはできない、と説明している。

「犯罪の基礎理論」において、セルフコントロールを欠くことは、教育や職業の成就を妨害する (Gottfredson & Hirschi, 1990, p.96) とあり、これはコミットメントの低さにつながる。また、セルフコントロールを欠く人は、規律、監視、その他彼らの行動を拘束するような状況を嫌う (同, p.157) とあり、これはピリーフの低さをもたらそう。加えて、セルフコントロールの低い人はあらゆる社会的組織に対してアタッチメントやインボルブメントを避ける傾向がある (同, p.168) とされ、これらの絆が弱いことも推察できる。しかし、関連があることイコール同義というのはいささか乱暴に思われる。上述の Hirschi (2004) の尺度は、Akers (1991) のトートロジーであるとの批判を免れられてはいるが、これでは、折角提示した2つの別個の概念の存在理由がなくなってしまう。むしろ、これらの記述からは、セルフコントロールの低さが弱い絆をもたらすとまとめられるのではないか。

実証研究において、社会的絆とセルフコントロールの両変数を同時に組み込んだ検討がなされている。Longshore, Chang, & Messina (2005) では、衝動性、危険希求性、気性の激しさについての自己申告で測定したセルフコントロールと非行との間に社会的絆が仲介するのではないかとモデルを立て、そのモデルが妥当であるとの結果を得ている。また、親・友人・教師の評定でセルフコントロール変数を測定した Polakowski (1994)、Grasmick et al. (1993) でセルフコントロール変数を測定した Nagin & Paternoster (1994) や藤野 (2006)、衝動性、不注意、過活動、持続欠如、注意散漫や怒りっぽさの統制などでセルフコントロールを測定した Wright, Caspi, Moffitt, & Silva (1999) でも、同様の結果が得られている。すなわち、いずれの形でセルフコントロールを測定しようとも、セルフコントロールを欠くことが、アタッチメントやコミットメントへの投資を少なくさせ、それらを経由して、逸脱行動に対して間接的に影響を及ぼすことが明らかにされている。

加えて、セルフコントロール変数が、社会的絆変数を経由せずに、直接、逸脱行動に影響を及

ばすとの結果を得ている研究 (e.g., Nagin & Paternoster, 1994; Wright et al, 1999; 藤野, 2006) もあり、セルフコントロールと社会的絆が同義でないことが示唆されている。

ところで、上述の実証研究はいずれも、セルフコントロールが社会的絆に影響を及ぼすとの方向性で検討している。しかし、社会的絆の弱さゆえセルフコントロールをしない可能性もあろう。3節で触れたように、セルフコントロールは、衝動性などの低次レベルの自動的な情報処理を含むと同時に、意図的に行うことも含んだ概念である。一方、社会的絆は、社会とのつながりを情緒的あるいは認知的にとらえた概念である。これら双方を視野に入れることは、非行・犯罪に至る個人内の過程と対社会との関係性をふまえることを意味するのであって、今後、その関係を明らかにすることが期待される。それは、非行・犯罪抑止へのより効果的な介入を考える上でも有用であろう。

7 セルフコントロールの形成及び可変性をめぐって

ゴットフレドソンとハーシーは、先行研究をもとに、低知能、高活動水準、身体面での頑健さ、冒険好きなどの特徴と犯罪に走るかどうかには、弱から中程度の相関関係があるとしながらも、子どもの特性がどうであれ、そして、子どもの特性に違いはあろうが、効果的な社会化は可能であり (Gottfredson & Hirschi, 1990, p.96)、セルフコントロールの低さの主たる原因は、効果的でない養育にある (同, p.97) としている。生まれもった資質が直接セルフコントロールに影響するのではなく、成長の過程での社会化に働きかける養育のされ方に媒介されるとの主張である。そして、Hirschi (2004) では、育児研究の草分け的存在であるパターソンの業績等を参考にしたとして、子どもの責任を有する者としての当然の帰結であるケアと興味を前提とした監視と制裁でもって子育てを行うことを推奨している。

親の監視・しつけとセルフコントロールに関連があるとの実証研究 (e.g., Hay, 2001; Perrone, Sullivan, Pratt, & Margaryan, 2004) に加えて、特性と養育の双方を検討したものもある。たとえば、脳の機能障害による ADHD の臨床像は多動性・衝動性または不注意の症状を呈し、セルフコントロールを欠く状態と重なるところがあるが、Moffitt (1990) は、「ADHD の症状のみを示す」群と「ADHD と逸脱行動の双方を示す」群との比較で見られる差異に、家庭環境の劣悪さがあるとしている。さらに、Unnever, Cullen, & Pratt (2003) では、ADHD の非行への直接効果は微々たるもので、ADHD はセルフコントロールの低さに影響を及ぼし、そのセルフコントロールが逸脱行動に結びついていること、そして、このセルフコントロールには、ADHD のみならず親の監視なども影響を及ぼしていることを数量的に示している。これまで見てきたようにセルフコントロールは多層の構造であるが、非行・犯罪に影響するセルフコントロールについては養育の影響が大きいことが示唆される。

このほか、Tittle, Ward, & Grasmick (2003b) は、犯罪や逸脱行動に性差が見られる一因とし

て、子どもの性別によって親の育て方が異なることを検証している。すなわち、性別によって親の働きかける内容が異なることがセルフコントロールの程度に差を生じさせ、それが性別による逸脱行動の差の一因になっていることを示している。

ところで、ゴットフレッドソンとハーシーは、セルフコントロールについての個々人の特徴は、犯罪に対する責任年齢以前に同定でき、しかも、生涯を通じて持続する傾向がある (Gottfredson & Hirschi, 1990, pp.90-91)、人生の初期段階におけるセルフコントロールの低さから犯罪を予測できる (同, p.119)、としている。そして、この主張をもとに、犯罪者に対するどのような働きかけも有効ではなく、刑事司法機関における犯罪行動削減の更生プログラムの効果はそのコストに見合わない (同, pp.268-269)、と言及している。

しかし、Polakowski (1994) は、12～14歳時のセルフコントロールが8～10歳時のセルフコントロールのみならず、8～10歳時の社会的絆の影響も受けていることを示し、変化しないわけではないとしている。また、Hay & Forrest (2006) は、セルフコントロールはおおむね安定しているものの10歳以降でも変化しうること、人生初期に限定されずに親からの働きかけの影響を受けて変化することを示している。さらに、3節で言及した学習理論に基づいたセルフコントロール研究では、自分を自分で管理・制御するという観点から行動変容をとらえており、この流れを汲んだ行動療法の一形態として、自己教示、自己記録、自己契約、自己強化、自己罰、自己管理的刺激制御などの様々なセルフコントロール法が提唱され、その臨床的效果が確認されている (坂野, 1995, p.20)。すなわち、療法によってセルフコントロールは変えられるとされている。

発達の初期段階の影響は大きく、その段階での適切な働きかけが効果的かつ効率的であって、それはセルフコントロールについても例外ではなかろう。その意味で、幼少期の適切な養育を充実させてセルフコントロールを育成し非行・犯罪抑止につなげるという政策は推奨されよう。とはいえ、上述のとおり、それ以降の働きかけが徒労であると断言することはできないとまとめられよう。

8 おわりに—適応という視点からのセルフコントロール—

最後に、ゴットフレッドソンとハーシーは専らセルフコントロールの低さを取り上げているが、セルフコントロールのあり様にそれ以外の視点もあることに触れたい。Baumeister & Heather-ton (1996) は、Gottfredson & Hirschi (1990) のセルフコントロールの低さに相当する不十分な制御 (underregulation) のほかに、間違っただ仮定や間違っただ方向に対する努力ゆえに生じる間違っただ制御 (misregulation) という概念を提示している。どの方向に向けてのコントロールかという視点である。加えて、コントロールしないこと (under control) のほか、コントロールしすぎること (over control) も問題であるとの指摘 (e.g., Eisenberg, Fabes, Guthrie, & Reiser, 2002; Van Aken, Van Lieshout, Scholte, & Haselager, 2002) もあり、コントロールの程度が

中庸であることが、レジリエンスが高いことであるとの見解も示されている (e.g., Van Aken et al., 2002)。

このほか、十分にセルフコントロールができることが、社会適応の良さに通じるとの非行・犯罪とは逆の方向性についての検討もなされている。例えば O’Gorman & Baxter (2002) は、セルフコントロール尺度の高さと、健康な成人の人格特性を5つの主要な次元で測る NEO の下位尺度「誠実性⁽⁸⁾」との間に高い相関が見られたとして、このことに言及している。

これらは Gottfredson & Hirschi (1990) の視点とは異なる。しかし、セルフコントロールの望ましいあり様を広く考える中で、非行・犯罪にかかわるセルフコントロールを検討するということも有用であろう。

〔注〕

- (1) 上田 (2007) がこの理論にかかわる最近の研究動向・概要をまとめている。
- (2) Grasmick et al. (1993) の指標を用いた我が国の研究には、河野・岡本 (2001) や小保方・無藤 (2005) などがある。
- (3) Grasmick et al. (1993) は、⑧について言及していない。
- (4) Gibbs & Giever (1995) は、Grasmick et al. (1993) のうち、身体を動かすことを好む傾向はあまり負荷が高くないとして、それを除く40項目からなる尺度を作成しており、Grasmick et al. (1993) 同様、一次元であることを確認している。
- (5) Hirschi (2004) は、セルフコントロールを特定の行為に対するあらゆる範囲の潜在的損失を考慮する傾向と再定義している。しかし、Higgins (1997) の主張を踏まえるならば、利得を考えず損失のみを勘案することに疑問が残る。
- (6) ハーシーは、理論の統合可能性に関して、社会的絆理論は個々人の比較的安定した犯罪行動等に従事する傾向である犯罪性を説明し、合理的選択理論は犯罪という出来事を説明するとして、その両立は可能である (Hirschi, 1986, pp.113-114) としている。
- (7) 上田・尾山・津富 (2009) は、この Hirschi の尺度について検討しており、Grasmick et al. (1993) の尺度に比べて逸脱行動に対する併存的妥当性はやや欠ける、としている。
- (8) 自分が有能で分別があり思慮深いという感覚である「コンピテンス」、几帳面で整理整頓が行き届いているなどの「秩序」、良心に従って行動する「良心性」、向上心があり、高い目標を達成するために一生懸命努力をする「達成追求」、退屈したり気を散らされたりしても最後までやり通す「自己鍛錬」で測定されている。

引用文献

- Agnew, R. (2005). *Why do criminals offend? A general theory of crime and delinquency*. Los Angeles, California: Roxbury Publishing Company.
- Akers, R. L. (1991). Self-control as a general theory of crime. *Journal of Quantitative Criminology*, 7, 201-211.
- Baumeister, R. F. & Heatherton, T. F. (1996). Self-regulation failure: An overview. *Psychological Inquiry*, 7, 1-15.
- Carver, C. S. (2005). Impulse and constraint: Perspectives from personality psychology, convergence with theory in other areas, and potential for integration. *Personality & Social Psychology Review*, 9, 312-333.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. (1982). Control theory: A useful conceptual framework for personality-social, clinical, and health psychology. *Psychological Bulletin*, 92, 111-135.
- Carver, C. S. & White, T. L. (1994). Behavioral inhibition, behavioral activation, and affective responses to impending

- ing reward and punishment: The BIS/BAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 319-333.
- De Vries, R. E., De Vries, A., De Hoogh, A., & Feij, J. (2009). More than the big five: Egoism and the HEXACO model of personality. *European Journal of Personality*, **23**, 635-654.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Guthrie, I. K., & Reiser, M. (2002). The role of emotionality and regulation in children's social competence and adjustment. In L. Pulkkinen, & A. Caspi (Eds.), *Paths to successful development: Personality in the life course*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.46-70.
- Ellis, L. K., Rothbart, M. K., & Posner, M. I. (2004). Individual differences in executive attention predict self-regulation and adolescent psychosocial behaviors. *Annual of the New York Academy of Sciences*, **1021**, 337-340.
- 遠藤利彦 (2005). アタッチメント理論の基本的枠組み 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメント—生涯にわたる絆— ミネルヴァ書房 pp.1-31.
- Eysenck, S. B. G., Pearson, P. R., Easting, G., & Allsopp, J. F., (1985). Age norms for impulsiveness, venturesomeness, and empathy in adults. *Personality and Individual Differences*, **6**, 613-619.
- 藤野京子 (1994). 図書紹介 A General Theory of Crime 中央研究所報, **6**, 19-22.
- 藤野京子 (2006). social bond と self-control との関係—一般高校生への調査結果から— 日本犯罪学会第33回大会報告要旨集, 55-56.
- Gibbs, J. J. & Giever, D. (1995). Self-control and its manifestations among university students: An empirical test of Gottfredson and Hirschi's general theory. *Justice Quarterly*, **12**, 231-56.
- Gottfredson, M. R. (2011). Sanctions, situations and agency in control theories of crime. *European Journal of Criminology*, **8**, 128-143.
- Gottfredson, M. R. & Hirschi, T. (1990). *A general theory of crime*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Grasmick, H. G., Tittle, C. R., Bursik, Jr. R. J., & Arneklev, B. J. (1993). Testing the core empirical implications of Gottfredson and Hirschi's general theory of crime. *Journal of Research in Crime and Delinquency*, **30**, 5-29.
- Gray, J. A. (1982). *The neuropsychology of anxiety: An enquiry into the functions of the septo-hippocampal system*. New York: Oxford University Press.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2009). 自己制御が社会的迷惑行為および逸脱行為に及ぼす影響—気質レベルと能力レベルからの検討— 実験社会心理学研究, **48**, 122-136.
- Hay, C. (2001). Parenting, self-control, and delinquency: A test of self-control theory. *Criminology*, **39**, 707-736.
- Hay, C. & Forrest, W. (2006). The development of self-control: Examining self-control theory's stability thesis. *Criminology*, **44**, 739-774.
- Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, **52**, 1280-1300.
- Hirschi, T. (1969). *Causes of delinquency*. Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press.
- Hirschi, T. (1986). On the compatibility of rational choice and social control theories of crime. In D. B. Cornish & R. V. Clarke (Eds.), *The reasoning criminal: Rational choice perspectives on offending*. New York: Springer-Verlag, pp.105-118.
- Hirschi, T. (2004). Self-control and crime. In R. F. Baumeister & K. D. Vohs (Eds.) *Handbook of self-regulation: Research, theory, and applications*. New York: The Guilford Press, pp.537-552.
- Hirschi, T. & Gottfredson, M. (1993). Commentary: Testing the general theory of crime. *Journal of Research in Crime and Delinquency*, **30**, 47-54.
- Keane, C., Maxim, P. S., & Teevan, J. J. (1993). Drinking and driving, self-control, and gender: Testing a general theory of crime. *Journal of Research in Crime and Delinquency*, **30**, 30-46.
- Kendall, P. C. & Wilcox, L. E. (1979). Self-control in children: Development of a rating scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **47**, 1020-1029.
- 河野莊子・岡本英生 (2001). 犯罪者の自己統制、犯罪進度及び家庭環境の関連についての検討 犯罪心理学研究,

39(1), 1-14.

- Longshore, D., Chang, E., & Messina, N. (2005). Self-control and social bonds: A combined control perspective on juvenile offending. *Journal of Quantitative Criminology*, 21, 419-437.
- Moffitt, T. E. (1990). Juvenile delinquency and attention deficit disorder: Boys' developmental trajectories from age 3 to age 15. *Child Development*, 61, 893-910.
- Nagin, D. S. & Paternoster, R. (1994). Personal capital and social control: The deterrence implications of a theory of individual differences in criminal offending. *Criminology*, 32, 581-606.
- 小保方晶子・無藤隆 (2005). 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因 発達心理学研究, 16, 286-299.
- O'Gorman, J. G. & Baxter, E. (2002). Self-control as a personality measure. *Personality and Individual Differences*, 32, 533-539.
- Patton, J. H., Stanford, M. S., & Barratt, E. S. (1995). Factor structure of the Barratt impulsive scale. *Journal of Clinical Psychology*, 51, 768-774.
- Paunonen, S. V., Haddock, G., Forsterling, F., & Keinonen, M. (2003). Broad versus narrow personality measures and the prediction of behaviour across cultures. *European Journal of Personality*, 17, 413-433.
- Perrone, D., Sullivan, C. J., Pratt, T. C., & Margaryan, S. (2004). Parental efficacy, self-control, and delinquency: A test of a general theory of crime on a nationally representative sample of youth. *International Journal of Offender Therapy and Comparative Criminology*, 48, 298-312.
- Piquero, A. R., MacIntosh, R., & Hickman, M. (2000). Does self-control affect survey response? Applying exploratory, confirmatory, and item response theory analysis to Grasmick et al.'s self-control scale. *Criminology*, 38, 897-929.
- Polakowski, M. (1994). Linking self- and social control with deviance: Illuminating the structure underlying a general theory of crime and its relation to deviant activity. *Journal of Quantitative Criminology*, 10, 41-78.
- Pratt, T. C. & Cullen, F. T. (2000). The empirical status of Gottfredson and Hirschi's general theory of crime: A meta-analysis. *Criminology*, 38, 931-964.
- Rosenbaum, M. (1980). A schedule for assessing self-control behaviors: Preliminary findings. *Behavior Therapy*, 11, 109-121.
- Rothbart, M. K., Ahadi, S. A., & Evans, D. E. (2000). Temperament and personality: Origins and outcomes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 122-135.
- 坂野雄二 (1995). 認知行動療法 日本評論社
- 白井利明 (1993). 時間的信念尺度の検討に関する研究 大阪教育大学紀要第IV部門, 42(1), 51-57.
- 杉若弘子 (1995). 日常的なセルフ・コントロールの個人差評価に関する研究 心理学研究, 66, 169-175.
- Tittle, C. R., Ward, D. A., & Grasmick, H. G. (2003a). Self-control and crime/deviance: Cognitive vs. behavioral measures. *Journal of Quantitative Criminology*, 19, 333-365.
- Tittle, C. R., Ward, D. A., & Grasmick, H. G. (2003b). Gender, age, and crime/deviance: A challenge to self-control theory. *Journal of Research in Crime and Delinquency*, 40, 426-453.
- 塚本伸一 (2000). 自己統制 久世敏雄・齋藤耕二 (監修) 青年心理学事典 福村出版 p.168.
- 上田光明 (2007). 犯罪学におけるコントロール理論の最近の展開と主な論争点の検討 犯罪社会学研究, 32, 134-145.
- 上田光明・尾山滋・津富宏 (2009). General Theory of Crimeにおけるセルフコントロールの尺度化—ボンド理論との整合性は確保できるか— 犯罪社会学研究, 34, 116-133.
- Unnever, J. D., Cullen, F. T., & Pratt, T. C. (2003). Parental management, ADHD, and delinquent involvement: Reassessing Gottfredson and Hirschi's general theory. *Justice Quarterly*, 20, 471-500.

- Van Aken, M. A. G., Van Lieshout, C. F. M., Scholte, R. H. J., & Haselager, G. J. T. (2002). Personality types in childhood and adolescence: Main effects and person-relationship transactions. In L. Pulkkinen & A. Caspi (Eds.), *Paths to successful development: Personality in the life course*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.129-156.
- VandenBos, G. R. (2006). *APA dictionary of psychology*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Weigel, R. H., Hessing, D. J., & Elffers, H. (1999). Egoism: Concept, measurement and implications for deviance. *Psychology, Crime & Law*, **5**, 349-378.
- Wikström, P.-O. H. & Treiber, K. (2007). The role of self-control in crime causation: Beyond Gottfredson and Hirschi's general theory of crime. *European Journal of Criminology*, **4**, 237-264.
- Wilson, J. Q. & Herrnstein, R. J. (1985). *Crime and human nature*. New York: Simon & Schuster.
- Wright, B. R. E., Caspi, A., Moffitt, T. E., & Silva, P. A. (1999). Low self-control, social bonds, and crime: Social causation, social selection, or both? *Criminology*, **37**, 479-514.
- 山形伸二・高橋雄介・繁栞算男・大野裕・木島信彦 (2005). 成人用エフォートフル・コントロール尺度日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, **14**, 30-41.
- 山口麻衣・鈴木直人 (2007). 衝動的行動質問紙の作成と衝動的行動に影響するパーソナリティ特性との関係性の検討 感情心理学研究, **14**, 129-139.
- 安田朝子・佐藤徳 (2002). 行動抑制システム・行動接近システム尺度の作成ならびにその信頼性と妥当性の検討 心理学研究, **73**, 234-242.
- Zuckerman, M., Eysenck, S., Eysenck, H. J. (1978). Sensation seeking in England and America: Cross-cultural, age, and sex comparisons. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **46**, 139-149.